厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業
（免疫アレルギー疾患等政策研究事業（移植医療基盤整備研究分野））
分担研究報告書

小児からの臓器提供に必要な体制整備に資する教育プログラムの開発
セミナー・パンフレット広報活動を通した啓発活動

研究分担者　瓜生原 葉子　　同志社大学商学部 准教授

研究要旨:
小児臓器提供における家族の意思決定において、日頃から家族で臓器移植・臓器提供についての話しをしておくことが重要であるが、そのきっかけとして、学校教育で題材として取り上げられることが必要である。すなわち、教科書などで標準的な題材とされ、教諭が自信をもって授業を実施できるための整備が不可欠である。そこで、まず、2019 年度 4 月より「道徳」が必修化される中学校における臓器移植に関する教育の現況を調査した。その結果、中学教諭の行動変容に資する学習支援ツールとして、50 分の組み立て、授業のポイントを示す「動画」が有効であることが示唆され、作成をした。それに対する意見聴取から、を以下の要領で作成した。動画の内容について概ね有用であったが、リアリティを与える工夫、意思表示媒体の配布、家族との対話を促す工夫が今後の課題として挙げられた。

A. 研究目的

臓器提供の現場において、家族が提供の可否について意思決定する際、「ドナー本人の生前の意思」,「家族メンバーの臓器提供に対する態度」,「施された医療に対する満足度」の3点が影響する(瓜生原，2012)。また、臓器提供についての家族間の対話の重要性が報告されている(Burroughs，1998; Harris，1991; Tymstra，1992)。

小児臓器提供における家族の意思決定において、日頃から家族で臓器移植・臓器提供についての話しをしておくことが重要であるが、その機会は決して多くない。家族との対話が生まれる最も有用なきっかけとして、学校の授業で取り上げられることが考えられる。

2019年4月より、中学校における「道徳」の授業が必修化され、その教科書に臓器移植が含まれる動向にある。そこで、中学校教諭が臓器移植に関する授業を実施できる環境整備、授業をきっかけとした家族との対話を促すしくみが必要と考えられる。

本一連の研究の目的は、①中学校における臓器移植に関する教育の現況を把握し、②「中学教諭が臓器移植に関する教育を実施してみようと思い(行動意図)，複数名が実施し(行動)，その経験を共有する」ことを行動目標とした教育支援ツールを開発し、その検証を行うことである。

B. 研究方法

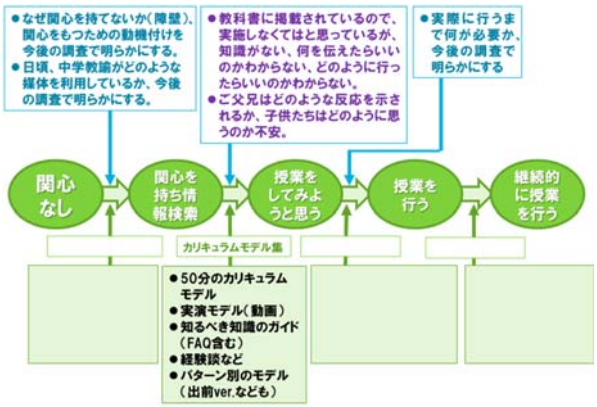
<u>3年間の計画</u>

「中学教諭の臓器移植授業実施」に関する行動変容ステージモデル(Prochaska & Velicer，1997)を以下の図のごとく考えた。イノベーション普及理論(Rogers，1962)と行動変容理論に基づき，各年度のターゲットと目標は次のとおりである。

【2018年度】
・ターゲット:既に臓器移植の授業を実施している人(innovators)，行動変容ステージでは「継続的に授業を行う」層の人
・目標:ターゲットの活動から授業モデルを作成する。

【2019年度】
・ターゲット:innovatorの実演例を知り，実施をする層(early adopters)，行動変容ステージでは「関心を持ち継続的に情報検索」層
・目標:授業実施者のネットワーキングをし、多様な授業実施モデル(各人の習熟度や資源に合わせたパターン)を作成する。それを、セミナーやweb siteで共有する。

【2020年度】
・ターゲット:出遅れないように、自分も実施してみようと挑戦する層(early majorityのより早期)，行動変容ステージでは「関心なし」層
・目標:多様な形態での実施例を集め、実例集を作成する。その広報計画も策定し、2021年度以降に、より普及するしくみを作る。



2018年度の研究方法

中学校における臓器移植に関する教育の現況を把握し、そこから得られた知見に基づき支援ツールを作成し、その検証を試みた。

現況把握として、1)既に臓器移植の授業を実施している中学教諭に対する半構造化インタビューを実施した。調査項目は、授業を行う障壁とその障壁への対応案であった。また、2)中学校の道徳の教科書に関する記載について調査を実施した。

次に、3)調査結果を基に、学習支援ツールの開発し、4)それに対する意見を聴取し、次年度につながる課題を見出した。中学生を対象とした著往査は困難であったため、研究者の接近可能性により、対象者を大学生とした。動画を視聴した意見を「中学生として授業を受ける」観点から記載してもらう形式をとった。

なお、インタビュー、意見聴取の実施にあたり、倫理面の配慮を行った。

C. 研究結果

1)中学教諭に対するインタビュー

既に臓器移植に関する授業を実施している1名に対する、インタビューの結果、授業を行う障壁として、以下の点が挙げられた。

・知識が不足している(最低何を知ればよいのかわからない)。
・何を伝えたらよいのかわからない。
・どのように行ったらいいのかわからない(50分間の組み立て、授業運営)。
・ご父兄はどのような反応を示されるか、子供たちはどのように思うのか不安。

その障壁への解決策として、冊子による情報提供ではなく、web で情報検索した時に見つかる「動画」が望ましいことが示された。

2)道徳の教科書における臓器移植に関する掲載

表のごとく、主要 7 社の教科書に掲載されていることが明らかとなった。

いずれも「生命の尊さ」に関する題材であった。しかし、視点は異なり、臓器提供に対して肯定的なストーリー・意見を主に考えるもの、否定的な意見も含んだ多様な意見を基に考えるものに大別された。また、本題材のみで授業を構成することは難易度が高いことも、インタビューから示唆された。

出版社	学年	頁数	指導要綱	題材
学校図書	2	8	生命の尊さ	大きな木（「大きな木」絵本の抜粋を読み，自分の死後，臓器が他人の役に立つのであれば提供したいか考える）
教育出版	3	2	命の大切さ	家族の思いと意思表示カード（提供の意思を示していた大学生の両親の意見の相違から自分の意思を考える）
日本文教出版	3	4	自他の生命の尊さ	臓器ドナー（自分の場合には提供に肯定的であるが家族には否定的な新聞投稿を読み，立場を変えて考える）
廣済堂あかつき	3	3	生命の尊さ	ドナー（上記と同じ投稿を読み，命はだれのものなのかを考える）
学研教育みらい	3	4	生命の尊さ	あなたの命は誰のもの（6 人の意見を読み考える）
光村図書	2	3	生命の尊さ	つながる命（6 歳未満の女児の提供家族の手記を読み，その家族の気持ち，命とは何かを考える）
日本教科書	3	6	生命の尊さ	臓器移植をめぐる命と心（独自の記述。臓器移植に関する問題を提供する側，提供される側で考える）

3)学習支援ツールの開発

道徳の授業として臓器移植の題材はどのようにすればよいのか，情報検索を試みている人が、「自分でもできるかもしれないと思う」授業支援ツールの作成を試みた。1)の結果より、50分の組み立て、授業のポイントを示す、「指導要綱案」と「動画」を以下の要領で作成した。

・「検索⇒動画視聴⇒50分の流れ、スライドデータ、家族と話そうシートをダウンロード」という流れをつくり、かつ、行動変容の検証(動画を見て授業をしようと思ったか)、次の行動へのmotivatorの調査を組み入れた。
・検索エンジン最適化を目的とし，動画の保存場所はyoutubeとした。

4)学習支援ツールに対する評価

大学生17名(男性名、女性名)を対象とし、「中学生として授業を受ける」観点からの意見を聴取した。その詳細は添付のとおりである。

評価されている点としては、次の5点であった。

・臓器移植を推進しているのではなく、あくまで「命の話」として臓器移植を題材したと伝えていた。

・最初に4つの権利を提示し、「まだ決められない」という選択肢もあることを伝えていた。
・“生と死”について言葉を選びながら直接的に伝えていた。また、「死」は私たちに必ず訪れることであるのを強調していた。
・「死」について改めて考えるきっかけ、臓器提供の意思表示への関心が持てるような内容であり、臓器移植の入りとしては簡潔で親しみやすかった。
・脳死と植物状態の違いについての説明がわかりやすかった。

一方、改善点としては、次の7点が挙げられた。

・臓器提供する臓器は本人のものであるが、やはりその“命”には両親がいて誕生したものであるから、家族との話し合いが大切であることを強調するほうが良いと思う。
・テレビ番組や実際にあった事例などを含めることでリアリティが増すのではないか。
・臓器移植を受けた当事者など、より個人的な、主観的な内容を語られた方が、心に響くのではないか。
・自分の意思決定が後にどうなるかというストーリーが提示されると良い。
・その場に意思表示できるものがある方が良い（意思表示カード）。
・15歳から臓器移植について意思表示できることを伝えると、生徒がさらに「自分ごと」として考えてくれるのではないか。同時に意思表示の方法や、自分の決定は何度でも書き直せることなども伝えていただきたいと思う。
・「話そうシート」はあるが、中学生時は、親と深い話をするには抵抗がある。より具体的な方法があればよい（「脳幹」が強調されていたが、これを話題にすることは難しい）。

D. 考察

中学校における「道徳」の授業が必修化され、その主要な7社の教科書に「臓器移植」が含まれることは、外部環境変化として好機である。しかし、授業が実施され、さらに授業をきっかけに家族と臓器移植の対話を生むまでには、いくつかの障壁があることが明らかになった。

したがって、「授業を行う」までのステップを、行動変容ステージモデルを適用し、その障壁と促進要因を明確にし、促進に寄与する教育支援ツールを開発、検証することは妥当であると考えられた。

今回作成した支援ツールの課題として、リアリティを与える工夫、意思表示媒体の配布、家族との対話を促す工夫が挙げられた。吉澤ら(2010)は、映像授業が内発的動機づけに効果的であると報告している。また、徳永（2011）は、当事者の存在の大切さを報告している。したがって、本支援ツールをサポートする題材として、臓器移植を身近に感じさせる動画、当事者の動画も併せて提供する必要性があると考えられた。

また、Sanner et al.（1995）は，関心が高まったタイミングで意思表示の手段を提供することの重要性を示唆する結果を導いている。したがって、授業で生徒の関心が高まっている段階で意思表示媒体の配布やインターネットでの登録方法などを提示することが効果的であると考えられる。

家族との対話を促す方法については、さらなる先行研究の調査に基づく考察が必要と考える。

また、今回、実際に動画を視聴尾した中学教諭に対する意見聴取を行えなかった。次年度にインタビュー調査を行うとともに、より広い意見を聴取するため、動画の視聴終了時に、行動意図（授業をしてみようと思ったか？）、意見（良かった点、改善点）、動画視聴前後の行動変容ステージ（5段階）、行動への促進因子（実際に授業をするにあたり、何が追加で必要か？）を訪ねるwebアンケートのしくみを導入したいと考える。

さらに、動画を視聴後、実際に授業をした教諭の経験の共有の場（グループワーク、セミナー、website）など、各人の自己効力感を醸成するしくみを創出していきたい。

E. 結論

小児臓器提供における家族の意思決定において、日頃から家族で臓器移植・臓器提供についての話しをしておくことが重要であるが、そのきっかけとして、学校教育で題材として取り上げられることが必要である。中学教諭が自信をもって授業を実施できるための整備として、現況調査で得られた知見を基に、学習支援ツール（動画）を作成した。今後は、動画をさらに効果的に活用するため、リアリティを与える工夫、意思表示媒体の配布、家族との対話を促す工夫が必要であることが示唆された。

【引用文献】

Burroughs, T.E., Hong, B.A., Kappel, D.A., and Freedman, B.K. (1998) “The Stability of Family Decisions to Consent or Refuse Organ Donation: Would You Do It Again?” *Psychosomatic Medicine*, Vol.60, No.2, pp.156-162.

Harris, R.J., Jasper, J.D., Lee, B.C., and Miller, K.E. (1991) “Consenting to Donate Organs: Whose Wishes Carry the Most Weight?” *Journal of Applied Social Psychology*, Vol.21, No.1, pp. 3-14.

Prochaska, J.O. And Velicer W.F. (1997) “The Transtheoretical Model of Health Behavior Change,” *American Journal of Health Promotion*. Vol. 12, No.1, pp.38-48.

Rogers, Everett M. (1962). *Diffusion of innovations (1st ed.)*. New York: Free Press of Glencoe.

Sanner, M.A., Hedman, H., and Tufveson, G. (1995) ″Evaluation of An Organ Donor Card Campaign in Sweeden.″ *Clinical Transplantation*, Vol.9, pp.326-333.

徳永龍子他(2011)「セルフヘルプメンバーが授業に参加することの学習効果～セルフヘルプメンバーと学生の有用性の一致と不一致～」『鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要』第15巻，49-54頁.

Tymstra, T.J., Heyink, J.W., Pruim, J.,and Slooff, M.J.H. (1992) “Experience of Bereaved Relatives Who Granted or Refused Permission for Organ Donation,” *Family Practice*, Vol.9, No.2, pp. 141-144.

瓜生原葉子(2012)『医療組織のイノベーションープロフェッショナリズムが移植医療を動かすー』中央経済社.
吉澤隆志，松永秀俊，藤沢しげ子(2010)「映像授業が学習意欲に及ぼす効果について」『理学療法科学』第25巻，第1号，13-17頁.

F. 健康危険情報
なし

G. 研究発表
1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3.その他
なし

	性別	感　想
大学３年生	女性	授業の映像を見て自分自身が中学生であったらどう考えたかという観点から意見を述べたいと思います。「命の授業をしに来た。」という言葉から臓器移植という言葉で話を受けるよりも話を受け入れやすいと感じました。最初に注意事項で様々なことわりをしてくださっているので心の方も重く感じることなく学べそうでした。死という言葉は日常では使わないので、最初に「リラックスしてね」などを言ってくれるので心の準備もできると思います。臓器移植を強制しているわけではないというのを前提にしているから考えやすいし、学びやすいと思いました。 「臓器移植の四つの権利＋１」について考えることから始まるので難しいと感じにくかったです。「もしも脳死になったら」「家族が余命を宣告されたら」という自分たちにも起こりうるかもしれない例えから入っているので自分ゴトとして考えやすいと思います。また、「日本ではこのような決断をとれるんだな」とそこまで重く考えなくていいからこそ、自分自身を見つめやすいと思います。また「決まらない」という権利が許されるんだと思いました。だからこそ考えるということに重要性を感じました。 生きている状態の話ではなく、臓器移植では脳死の段階から始まるということを知ることで「あげたい」人がドナーとなって、絶対に「あげたくない」という権利を主張している人から提供されないということがわかって安心できました。脳死ということを自分ゴトとしてこの状況を考えなければいけないということを理解できました。 死という種類は、一つではないということが理解でき、脳死と植物状態の違いが明確でした。臓器移植の歴史についてはイラストなど文字だけでなく、もう少し現実味がある方が受け入れやすい気がしました。臓器移植が可能な状況について、本人の意思だけでなく、家族の意思両方がイエスでなければならないということを知れました。本人が意思表示しなければ、もし自分自身が脳死になったときに決めるのは家族であるということが分かったからこそ、家族とこのような話を学んだと伝えたいと思いました。ただ、知りたいと思ったことや考えを生徒同士で共有する場があればもっといいと思いました。自分の考えを友だちに伝え、友だちの考えを聴くことでもっとこの内容について考えが深まり、自分ゴトとして考えられるのではないかと思いました。もっと、生徒が自発的に考えられるように発言をする場があってもいいと思いました。
大学３年生	女性	まず始めに、「臓器移植を勧めに来たわけではない」という言葉を聞いて安心しました。一方的に何か勧められる訳ではないのだという安心感のもとで聞くことができました。また、いのちの授業と言われることで、臓器移植のイメージに左右されずに聞いてみようと思うことができました。 基本的にリラックスして聞けたのですが、具体的に自分の死を考えるところはやはりあまりいい気分ではありませんでした。「帰宅するときにトラックに轢かれて死ぬかもしれません。みなさん。」と投げ掛けられた時はあまり考えたくない内容だなと思いました。いつどこでどうなるかわからない、自分ごとで考えよう、という話を伝えるための具体例であることはわかります。実際に、そういった具体例があることでよりはっきり自分のことに置き換えて考えられました。しかし、中学生に対しては衝撃もあり暗いイメージだけが残る可能性もあるため、死に関する具体的な話は出さなくてもいいのではないかと思いました。権利の話、脳死の話についてはとても分かりやすかったです。
大学３年生	女性	私が中学生の頃、“臓器移植”ということを考えたことはない。その中で、中学生に対してこのような学ぶ場が提供されるということはとても良い学べる環境だと思う。しかし、“臓器移植”の授業となると「意思表示をイエスにしなければいけない。」「勧められている。」と思ってしまう人も多くいる。よって、授業のはじめの部分の４つの権利である“あげたい”“あげたくない”“もらいたい”“もらいたくない”に加えて佐藤先生が付け足した“よく考えたけど決まらない”という選択肢を入れることは授業として必要であると感じた。どの権利も自由に持つことができる。この授業で大切なことは“臓器移植”ということを「他人ゴト」として捉えるのではなく「自分ゴト」として正しい知識を持ち、考えることが大切ということが伝わった。 このテーマで１番難しいことは国ごとの「死」の捉え方の違いだと思う。アメリカは「脳死は人の死」とされているために、ほとんどの人が脳死後の臓器提供で年間 8000 から 9000 人もの臓器提供者がいる。これは、日本人と違いアメリカ人が脳死を「人の死」と捉えていることに差である。ストーリーのところで、佐藤先生は脳死を伝えるために脳の機能の説明で“脳幹”を強調していた。“脳幹”は死んでしまうと動かせず、亡くなってしまうと再生することはできないことが医療の世界でわかっていることを伝えていたのでとてもわかりやすいと思った。正直なところ私は脳死と植物状態の違いが曖昧だったため大学生の私もとても理解しやすかった。日本の場合“臓器提供”が前提出ないと“脳死”というワードは出てこないためここで詳しく教えることがアメリカなど同じ「脳死は人の死」のように考え方を変える人も出てくるではないかと私は思う。 　また、本人の意思表示がイエスなのかノーなのかわからない？の人は家族が選択するということをもう少し強調して授業をした方がいいと思った。“臓器提供”する臓器は本人のものであるが、やはりその“命”には両親がいて誕生したものであるから家族との話し合いが大切になってくるということを入れればさらに良い授業になると思った。頭が真っ白な時に、冷静な判断ができないから正常な時に決めておかなければならないことはわかっている。しかし、佐藤先生もおっしゃっていた通り私も家族と“臓器提供”意思表示について話しをする場を作るということはとても難しいことだと私自身も感じる。だから、その場を設けるために家族と話そうシートを渡すことも１つだと思うが１番いいのはこの授業を親子一緒に受けることができればなお良いと思った。 　「死生観」を深まらせることは、これから生きていく上で避けては通れないことなので中学生ぐらいの時期から介入していくいことはいいと思う。私も実際に中学生の時に“命”の授業を受けたかったと思った。

	性別	感　想
大学３年生	男性	中学生の多感な時期にこのようないのちに関する授業を聞ける機会があるのは素晴らしいことだと感じた。自分事として考えてもらおうとすることや家族で話し合うのが困難なためシートを配布していることもきっかけづくりとしてよいと思った。 「こういうことがあった」だけだとピンとこないことがあるかなと感じたので、実際にあった事例などをテレビ番組やプレゼンターの方がお話するなどすると聞きやすいかなと感じた。自分が中学生の時は臓器移植という単語は知っていたが、意思表示の重要性やそれにまつわる命の尊さへのお話を聞いてこなかったので、臓器移植を進めずとも、意思表示は大切である旨は伝えていただけると分かりやすいとかんじた。 知識欲や刺激に敏感な時期なので、もっと刺激の強い話が合ってもいいと思った。
大学３年生	女性	「生命の尊さを知る」題材として、私たちがゼミで取り扱っている臓器移植が掲載されていることを知り、今の私の立場からしてもすごくいろんな感想を持った。“生と死”を用いた教育というものは敏感な世の中であるからこそ生徒たちに伝える方法としてすごく勉強になった。その中でも今回は課題にもあるように、「中学生として授業を受ける」観点からの意見を述べていく。 まず、中学生のときの自分を振り返ってみると動画でもあったように講演会のような授業形式で話された内容というのは、自分の中で心に残っているかと言われるとそうでもなかったように思う。その理由というのは今考えると、自分だったらどうかということを想像したり、考えたりすることが難しかったからではないかと思う。講演者の言葉選びであったり、どれだけダイレクトに聞いている側に伝わってくるかによって記憶に残る講演会、授業というものは決まってくるのではないか。その点を考えてみるとこの佐藤先生の講演というものは非常に記憶に残る、自分自身がしっかり考えることができる講演であったと感じた。というのも、“生と死”というワードを何のためらいも遠慮もせず、声に出してダイレクトに話しているからである。普通、このような大勢の中学生に向けての講演では、いろんな事情を持っている生徒を考慮した言葉選びだったり、内容を直接的ではなく遠回りして間接的に伝えたりするのではないだろうか。しかしそうすると生徒側はなかなか趣旨を掴めなかったり、心に響かなかったりする。実際に中学の私がそうであった。自分に関係ない話だと感じてしまうと、長時間集中できなくなり流しながら聞いてしまう。現に今でも自分のことと関連させて考えられる内容の方が記憶にも残りやすいと考える。そこで佐藤さんの講演でも、「もしかしたら皆さんが今日の帰り道、トラックにひかれて死んでしまうかもしれない」とか「家族や自分が脳死したら」とか最悪の状況を生徒に考えさせるような講演の仕方をしていた。この直接的な言葉を生徒に投げかけることで中学生からすると、傷ついてしまったり辛くなってしまったりする恐れもあるだろう。しかし佐藤さんはそれを考慮して、分かっているうえでこのような講演をしていた。それを反対する意見も多くあると思うが私はこのような直接的な伝え方をする方が生徒側は引き込まれる、考えることができるのではないかと感じた。危機感や、喪失感、怖さ、現実感などそのようなことを実際に経験していないからこそ想像しにくいし、抽象的で考えにくい。だからこそ生徒たちに直接的に伝えたいことを伝える。そうすることで大きく動かされる生徒も多くいるのではないかと感じた。 また、もう一つ印象に残っているのが“4つの権利＋1”である。この佐藤さんの講演は“生と死”についてダイレクトな言葉で話しているが、生徒たちにあらゆる選択肢を与えている。生命に関することであるため、そんなにすぐにイエスかノーかを決めろと言う選択肢だけでは生徒からすると圧力になるだろう。そこで佐藤さんの考えた“よく考えたが、まだ決まらない”という選択肢があると、より考えやすく想像しやすくなるのではないだろうか。重い内容だからこそ、じっくり真剣に考えることができる選択肢や時間を提示することで生徒も考えやすいと感じた。 家族ともしっかり話すことができる時期でもある中学生で道徳が教科化され、こうして臓器移植のことをじっくり考える場ができるとその生徒たちが大人になったときに意思表示を自分でできるきっかけにもなり、家族とも意見が合致できるのではないかと思う。私は実際これからゼミ活動で、小学生を対象に意思表示、生命の大切さを伝えていく側になるのでいい勉強にもなった。伝え方、選択肢の自由さ、広さを大切に考えていこうと思う。
大学３年生	女性	私が、この動画を視聴し、中学生として授業を受ける立場として考察したことは、大きく分けて３点ございます。 １点目は、佐藤先生が、終始一貫して「自分は臓器提供を勧めに来たのではなく、過去、現在、法律を伝えた上で、生徒たちに考えるきっかけを持ってもらうことが目的」という姿勢を持っておられた点が、印象的だったということです。授業を、決して価値観強制の場にはせず、あくまで、生徒たちが命について考える一つのきっかけにする、というスタンスが、生徒にとって、息苦しくなく、真剣でありながらもリラックスした雰囲気の授業につながったと考えます。 ２点目は、脳死と植物状態の違いについての説明が、わかりやすかったということです。生徒たちの中には、脳死と植物状態を混同している人もいると考えられるため、その点を改めて説明しておくことで、その後の学習の理解度を上げることにつながると考えます。 ３点目は、臓器を「あげたい」「あげたくない」「もらいたい」「もらいたくない」の４つの権利にプラスして、「よく考えたがまだ決まらない」という権利を強調してお話しされていた点がとても良かったということです。命に関わる重大な決断であるため、即座に決めることを躊躇する生徒もいると考えられるため、じっくり真剣に考える選択肢を与えているのがとても良いと考えました。 以上が、私が、中学校教員向けの動画を視聴して考察したことです。

	性別	感　想
大学３年生	女性	この講義を聞いて思ったのは、今臓器提供に関しての意思表示をするべきだということです。もし、自分や、家族がドナーとなったりレシピエントと急になったら正常な判断ができないということを今まで考えませんでした。頭が真っ白になった時に正しい判断は確かにできないだろうと思います。なので、今考える機会をつくることが大切なのだとわかりました。そして、いつ自分や家族がドナーやレシピエントとなってもおかしくないということも言われるまで気づきませんでした。自分ごととして臓器位提供を捉えることがとても大事なのだと思いました。 しかし、家族と臓器提供について考えるのはなかなかしにくいです。なぜなら、急にそういう真剣な話をする機会があまりないからです。大切なことだと分かっていてもなかなかいいづらいと思います。でも頑張って話してみようと思います。 普通の道徳の授業ではなく、ゲストスピーカーさんから聞く話はとても新鮮でとても印象的でした。とても話に引き込まれました。でも一つ気になったのは、なかなか私たち中学生が意思表示できるものが少ないということです。意思表示カードはどこにあるのかわからないし、免許証は持てないし、マイナンバーや健康保険証は親が管理していてあまりわかりません。インターネットもさほど使わないので、なかなか意思表示するのは中学生には難しいのかなと思いました。また、親に健康保険証について聞きたいと思います。 上記についての私の追記 家族と話そうシートでは、少し不十分だと思います。話そうシートを渡したとしても実際にやる人は少ないのでは、、、 でもこの大きな壁を越えるためにどういう衝撃を与えると効果的なのかを考えるのが SYVP なので、このへんも視野に入れながら活動を考えてもいいと思います。今考えた付け焼き刃な私の考えですが、やったほうがいいと思うこと↓ ・ゲストスピーカーなど外部の人を呼ぶことは大切。新鮮さが刺激になる→行動につながる？ ・意思表示カードを話のあとに渡す。 意思表示カードの設置場所は JOT によると都道府県市区町村役場窓口、一部の病院や一部のイオンなどになる。だけど、中学生が意思表示にめっちゃやる気の時にすぐに意思表示カードへアクセスできなければ、またそのやる気は下がり、意思表示への道は遠のくと思う。 そのため温かい時に鉄は打つべきだと思います。
大学３年生	男性	佐藤毅先生による中学生の道徳の授業に生命の尊さを知るために臓器移植を伝えることに対して、中学生として授業に受ける観点から考察していきたい。 　まず一つ目に、臓器移植を伝えるにあたって、どのような場合に臓器移植が行われているのかを伝えるために「死」について考えさせる講義の形であると感じました。「死」は私たちに必ず訪れることであるのを強調している点は中学生にも心に響くのではないかと思います。また、「死」について脳死の考え方が日本ではあまりなじみのない考え方であるという点を明示したうえで、脳細胞は機能が停止してしまうと再生しないという医療の視点からの講義は、「死」に対していつ訪れるかわからないものであり、今現在から少しずつ考えていかなければならないことだと意識できる講義だと感じました。 　二つ目に、臓器移植を法律の観点から、家族に決定権があるという事実を伝えたうえで、家族が困らないためにも意思表示をする必要性があるという、臓器移植の意思表示の目的がわかりやすいと思いました。しかし、意思表示をすべきであり、臓器移植のドナーになりたくないと拒否する権利もあるという点は、冒頭にしっかりと触れられていましたが、最後にも最初の内容がつながるように強調すべきなのではないかと感じました。 　年代別にアプローチしていくことを目標に一年間進めていくにあたり、実際にワークショップなどを行っていく際に、臓器移植について理解を深めてもらうことで意思表示の目的が伝わるということを身をもって感じました。また、臓器移植の理解の根幹にあるのは生命の尊さを伝えることであること、また「死」は身近であることだと感じました。
大学３年生	女性	この授業での目的は、自分ごととして考える→家族と話し合う→死生観を深める、とある。もちろん客観的な知識を得ることは、数十年後の将来、自分ごとになった時に考える手助けになるかもしれない。しかし、授業を受けた「今」、自分ごととして考えてもらうのであれば、どこかインパクトに欠ける内容に感じられた。 　話す内容が決まっていて、それを伝えているようにどうしても感じられてしまう。重いテーマであるため、決められた客観的な内容を伝えるだけでは、自分ごととして考える段階までは及び辛い気がする。 　実体験（事実＋感情）として語られる内容に、人は、特に感受性の高い時期である中学生は心動かされると思う。大勢の人向けに一般化された内容を語られるよりも、より個人的な、主観的な内容を語られた方が、心に響くのではないか。「いのちの大切さ」を伝える時は、いのちの大切さを一番に感じた方から紡がれる言葉によってこそ、その想いを伝えることができる気がする。 　よって、正しい知識を得ることに加え、難しいことかもしれないが、臓器移植の当事者からの話が聞くことができるという段階も加えられたら更にこの授業の目的に近づくことができると考える。

	性別	感　想
大学３年生	男性	・逃げ道として＋１の権利が示されているので安心。 　４つの権利だけでは自分が決めなくてはいけないと感じてしまう。しかし、＋１を提示されることで「考えなくてはいけないが決断はしなくていい」という風に意思表示を捉えられる圧迫感がないと感じられた。しかし、家にかえると「まだ決めなくてもいい」と都合よく解釈してしまい決断すること自体を忌避してしまうとも思われた。 ・家族との話し合いが恥ずかしい 　中学生の時は親と深い話をすることは少なく、部活などの諸連絡でしか話し合わないと感じた。また、いきなり深い話をするには勇気が必要であると感じられる。 ・脳死の説明が難しい 　脳死の状況の説明が難しいと感じた。また、そういう状況と診断してくれるのは医者であるので、自分が完全に理解していなくてもいいと感じた。そして、脳死の説明が難しいと感じた学生は授業から離脱してしまうとも感じられた。 ・どのメッセージが伝えたく、どうして欲しいのかがわからない 　歴史、仕組み、家族との会話、意思表示など話の内容が盛りだくさんであるが故に最終的に何がして欲しいのかをすんなりと理解できない。また、理解できたとしても、授業中で一番念押しされていた「脳幹」のことと家族と話し合うことのつながりを認識できないので、行動には移しづらいと感じる。
大学３年生	男性	あくまで「命の授業」だと題していたが、どうしても「臓器移植についての授業」の方がイメージが強かった。この講義を受けるのが中学生だからこそ、授業の作り方は困難なことかもしれない。最も気になった点は、全体的に講義の内容が受動的すぎることである。ただ話を聞いて板書をノートに写しておしまい、というように中学生が自身の頭を使って考える余地が計算されていないように見えた。もし、私が中学生としてこの授業を受けるのであれば、考える余地を作ってほしいと思うであろう。まず、この講義の良かった点を５つ挙げる。 ①最初に留意事項として「生」「死」という言葉が沢山出てくる。あくまでシリアスだが、リラックス。保健室に行くのも可、ということを伝えることは、生徒の権利を守る大事なことだと思う。 ②4 つの権利が存在することを知れる。 ③臓器移植を推進しているのではなく、あくまで「命の話」として臓器移植をピックアップした。 ④大脳、小脳、特に「脳幹」、「脳細胞」のことについて正しい知識が提供されていること。 ⑤死の定義にはいくつかあり、特に誤解されやすい「脳死」と「植物状態」の違いが講義されていたいこと。 　しっかりと講義しないといけない点について、一通り触れられていたのはよかったと思う。しかし、伝え方が少しさらっとしすぎていて、どこが重要で何を伝えたいのか何を知ってほしいのか、中学生だといまいち掴みきることができないような気がした。加えて、②の「臓器移植を推進しているのではなく、あくまで「命の話」として臓器移植をピックアップした」ということこそ、最も伝えなければならないこと(最も誤解されたくないこと)なのではないだろうか…だからこそ、もっと明確に伝える必要があると考える。次に、この講義の問題点だと考える点を６つ挙げる。 ①この講義は命の授業である、と言っておきながらいきなり臓器提供の４つの権利から始まるのはどうかと思う。ファーストインプレッションが、臓器提供になりかねないと考える。 ②中学生にいきなり権利の話をしたところで、権利を行使する機会がまだ少ない以上ピンとこないのではないだろうか？ ③過去と現状と法律を伝えているだけになっている箇所が多々あり、ただ事実を述べているだけなので、中学生の立場になったとき何を伝えたいのかうまく理解できず、よくわからないことで終わらしてしまうのではないか？ ④自分の意思決定が後にどうなるかというストーリーが伝わりにくい。 ⑤書き込む形式の授業は受動的すぎるので、自分で主体的に考える余地が生み出されない。 ⑥誰にでも必ず起こること、突然起こること、という点を強調したいように見受けられたが、誰にでも起こりうることがやはりどうしても非現実的で自分ごとと考えにくい。 　最後に、問題点をどうすればよりよくなるかについて私なりに考察していく。 講義の形式ついて、少なくとも改善した方がよいと考えた点がある。 ⑥についてだが、この選択肢(意思決定)を選ぶとこういうストーリーになるよ、ということをもう少しわかりやすくした方がいいのではと感じた。フローチャート的なものを資料として配布してイラストとして視覚からも理解できるようにした方がいいのではと感じた。 書き込む形式の授業って受動的すぎると感じた。Green Pride Fes で行っていたようにまずクイズ形式で問いてもらって、誤った知識を解く必要があると思う。少なくとも、ただの板書をする形式である受動的な講義よりも、クイズ形式を先に行い、自身の回答を自分で添削していく講義形式の方が、少なからず能動的ではあると思う。 　誤った知識や誤解を講義を通して生み出してしまうのが最も避けるべきことではあるのは間違いない。

	性別	感　想
大学３年生	男性	提示されたURLから動画を視聴し、「中学生」としての感想をまとめる課題である。まず、中学生として、という条件であるが、一般的な中学生を想起するのか、感想をまとめる者の中学生時代を思い出して書くのか、について、指示はなかった。そのため、私の判断で、以下の感想は中学生時代の私がこの授業を受けて抱くと思われる感想をまとめようと思う。また、授業の雰囲気など、受ける中学生の心持ちに関するものか、授業内容それ自体に関するものかの指示もなかったため、両方について書こうと思う。 まず、率直な感想として、この授業は「堅い」と感じた。教育であり、命を扱う題材であるため、堅い授業となるのは当然である。しかし、私のような中学生にとって、堅い話は内容によらず、現実感が湧かず、真剣に聞く姿勢に至りづらいのもまた事実である。というのも、科学に立脚しない個人の考えであるが、一般に中学生は人生における経験がまだ乏しく、本当の意味で話されている内容を自分と結びつけて考える機会が少ないのではないかと思う。大人に対してする講義と考えるならば、要点を理解しやすくしているため、聞きやすい、「良い」授業であると思われる。しかし、対象が中学生となったとき、そこに、現実感のある例示など、受ける側が自分にも関係のある話であると自覚できる段階を用意する必要があると感じた。 次に、授業の内容についての感想を記す。まず、全体的な内容において要点が示され、口による説明もわかりやすく、穴埋めで記述をすることで授業への参加をしやすいと思われる。ただ、一番重要であるとしたスライドは、情報量が多く、また脳細胞の説明に必要のない情報が多いため、そこで授業への集中力を切らすのではないかと思った。脳細胞に関する説明は、その次にされる心停止と脳死の説明の補助程度でもよいのではと感じた。また、歴史に関しても、年表にしてしまうことで、「最近施行された」という事実よりも勉強への拒否感が勝ってしまうように感じる。また、本人の意思でYESかNOを決められることや、意思表示をしていない場合の家族承諾についての話がこの講義の肝であるため、それを最初に強く提示したほうが、中学生としての私にとって話が見えやすいと思った。 まとめると、中学生に対象を絞るなら、授業が堅く、伝えたいことを伝えられる講義ではないと感じた。要点はわかりやすいが、堅さを作ってしまうのがもったいないように思われる。
大学３年生	女性	中学生の観点から動画を見た意見を述べたいと思う。 まず授業のはじめに先生が臓器移植を勧めているのではない、リラックスして聞いてほしい、とおっしゃっていたので臓器移植という言葉だけで重いテーマだと感じている生徒もあまり気を張らずに授業を受けられると感じた。また佐藤先生が初めに４つの権利＋１という「あげたい」「あげたくない」「もらいたい」「もらいたくない」の他に「よく考えたけどまだ決まらない」という選択肢をあげられた。これはとても大切だと思う。生徒たちは焦って決めるのではなく、自分は臓器移植についてどう感じているのかなど、自分ごととしてじっくり考えてくれるのではないかと感じた。 植物状態と脳死についての説明がとてもわかりやすかった。脳細胞は決して再生しないため、生きていくために必要な働きをする脳幹が壊れてしまうと脳死になり、他の脳の細胞が機能していなくとも脳幹は生きている状態のことを植物状態ということがわかった。私も恥ずかしながらはっきりとはこの違いを知らなかったので脳幹が壊れているかいないかという大きな違いがあることを学ぶことができた。また初めに佐藤先生が脳幹という言葉を強調していらっしゃったので中学生も理解しやすいのではないかと思う。しかしこのパワーポイントの脳死の「臓器移植が前提となる場合は２種類」というのが少しわかりにくいかなと感じた。 佐藤先生のお話は死や臓器移植が他人事ではなく私たちも直面する可能性が十分あるということがとても伝わってきた。また自分が臓器移植の意思表示をしていなければ家族が決めないといけない、何かあった時にではなく冷静な時に話し合いをして意思表示をしておいたほうがいいという意思表示の必要性を丁寧に説明されていて中学生の皆さんも臓器移植のことを通して、自分や家族が脳死になった後の「命」について学ぶことができたのではないかと思う。 中学校の先生方には15歳から臓器移植についてYESと意思表示できることを伝えていただくことで生徒の皆さんがさらに「自分ごと」として考えてくれるのではないかと思う。同時に意思表示の方法や、自分の決定は何度でも書き直せることなども伝えていただきたいと思う。 SYVPの年代別アプローチの中学生を担当させていただく私にとって、どのように臓器移植について説明するのか、きちんと伝えるためにどのような言い回しが適切なのかなどこの佐藤先生の動画はとても参考になった。佐藤先生の授業のように中学生の皆さんにわかりやすく、「他人ごと」ではなく「自分ごと」として向き合ってもらい、家族の方とどうしたら会話の機会を作れるかを考えていきたい。
大学３年生	女性	私が中学生という立場からこの授業をみると、臓器移植に関する基本的な知識をみにつけられる良い機会だなと感じました。特に、混同されやすい脳死と植物状態の違いが説明されていることがとても良いと感じました。しかし中学生がこの授業をうけたときに、この授業を通して伝えたいことである「臓器移植というものを自分ごととして捉え、命の大切さについて考える」を実際に伝わるかという面で考えると、この授業は中学生にとっては少しインパクトが薄いのではないかと思いました。この臓器移植を道徳の授業で行うということも考慮すると、生徒の心が動かされるような題材を少し加えれば、臓器移植を自分ごととして考えるということにより繋がるのではないかと考えました。例えば、この授業の最初に臓器移植に関連するドキュメンタリー番組を生徒にみせるなどすると、より生徒の心が動き、この授業ももっと関心を持って聞くことができるようになると思いました。

	性別	感　想
大学３年生	女性	・知識のインプットが多いため臓器移植について知るきっかけにはなるが、意思表示について考えようとはあまり感じない。 道徳の授業というよりは保健の授業という印象。 主旨は知識を与えることなのか、それとも意思表示の大切さについて考えてもらうことなのかをもう少し明確にした方がいいかもしれない。 ・具体的な経験を聴くのが一番自分ごととして考えるきっかけになると思うため、誰かの経験を話に入れるとよいかも (私は移植医療について初めてちゃんとお話を聴いたのは、脳死腎移植を受けられた加藤みゆきさんの講演でした。それまで意思表示について考えたこともなかったけどすごく考えようという気持ちになりました) ・意思表示をしないと家族や自分が困る、という認識も大切だけどプラスアルファの価値として意思表示によって人の命を救うことができるかもしれないのに、しないのはもったいないということを伝えると意思表示カードに書くという手間をそんなに手間だと思わなくなるかも (いざという時自分や家族が困ると言われてもあまり実感できないけど、いま困っている人はいるからその人たちの命を救うことになるという認識の方がイメージしやすい)
大学３年生	女性	この動画を視聴して、初めて臓器移植について学ぶ中学生から見ると、まず「死」とは何だろうか、臓器移植とは何なのか、そして臓器提供の意思表示の大切さというのを主に、中学生でも理解しやすい説明で伝えられていたような印象を受けました。臓器提供に関しては「４つの権利」にさらに＋１で「よく考えたが、まだ決まらない」という権利を付け足されていたことで、臓器提供の意思表示を早くしないといけない、「はい」か「いいえ」しか選択肢がないという焦りや不安を拭えていたように感じました。どうしても臓器提供の意思表示という言葉を聞くと、早くしないといけないのではないかと、意思表示することに対してあまり良いイメージを持ちづらいのではないかと思います。しかし、この動画では意思表示について無理に今すぐ答えを出す必要はないこと、ゆっくり自分の意思で決めることが大事であること、またその答えが何かのきっかけで変わっても構わないことを前提として伝えながらお話されているので、臓器提供の意思表示に対して不安や恐怖を感じられませんでした。また「死ぬ人がいるからこそ、生きていける人がいる」という臓器移植のストーリーをお話されている時に、当たり前のことではあるが、「死」は誰にでも平等にやってくること、その「死」が突然起こってしまうこともあるということを再確認してもらうことで、自分がそのストーリーの死ぬ側の人間になるかもしれない、もしくは自分の知らない死ぬ人から臓器提供を受けて生きていく側の人間になるかもしれない、それはどちらもいつ自分の身に起こるか分からないということを、自分自身のことであるかのように一度考えられるのではないかと思いました。こうやってもし自分の身に起きたら？という想定をすることで、今まで他人事のように感じていた臓器移植や臓器提供がすごく身近に感じられ、それらに興味を持てるようになると思いました。以上から、この動画は「死」について臓器移植という１つのテーマを用いて、臓器移植、臓器提供の意思表示とは何か、といった基本的な内容を中学生向けに分かりやすく説明しながら、「死」について改めて考えるきっかけ、臓器提供の意思表示への関心が持てるような内容であり、臓器移植の入りとしては簡潔で親しみやすかったのではないかと思います。また中学校教師がこの動画の後に＋αで臓器提供の現状であったり、臓器提供から移植までの流れ、臓器移植を受けた後の生活、また意思表示の仕方などをお話されたら、もっと臓器移植について深く学ぶことが出来るのではないかと思いました。こうした「死」について臓器移植を題材に中学生に向けてお話することで、早い段階で臓器移植や臓器提供について関心を持つことができたり、意思表示について考える時間が十分にあるというのがとても良いことであると思いました。私はこれをきっかけに沢山の人に臓器移植、臓器提供について関心を持ってもらえたらいいなと感じました。
大学３年生	男性	この動画は、中学生に対して「臓器提供について考えるきっかけ」を与えることを一番の目的にしていると感じました。実際に自分が中学生の頃は、移植医療のことなどまったくと言っていいほど知らなかったので、一番基礎となる知識を伝え、現状を知ってもらうことで考える一助になると思います。 しかし、中学生の段階で「死」を身近に感じたことがある人は少ないと思いますし、なんとなく現実味を感じられないというか、具体的にイメージしづらいように感じました。「4 つの権利+１」を全員が持っていることや、制度や社会の仕組みを伝えることも大切だと思いますが、実際に臓器移植を経験した人やその家族の体験談などが取り入れるとより現実味がわき、イメージしやすくなるのではないでしょうか。 意思表示の重要性や必要性により焦点を当てて説明するのも良いと思います。自分の経験上、知識を与えられただけでは実際に行動しないことの方が多いような気がします。しかし、その行動の重要性や必要性が自分の中に落とし込めた時は行動に移すことが出来ます。 以上が、動画を視聴して感じたことです。